

「コロナ禍という言葉が世に響くようになり、早くも一年半…。当初は、「早期に通常の生活を取り戻す」とか、「日常を取り戻す」などの言葉をよく耳にした。そう言えば、「日常」って何だろう…。ここ最近では、「コロナ疲れ」から「コロナ慣れ」、「緊急事態慣れ」なる言葉が飛び交いはじめた。そもそも「緊急事態」は最大級の「非日常」を意味するのではないだろうか？ 私自身「日常」がどのような状況なのか、わからなくなってきた。家族も同僚もみんなマスクをし、デスクには個人用の手指消毒液が置かれている…。そんな光景が「新たな日常？」なのか。はじめて緊急事態宣言が出された時、明らかに街から人の気配が消えた。私も職場と家の往復とコンビニ以外には行かない生活が二ヶ月以上続いた。あの頃は、一年後には、これまでの日常を取り戻し「東京オリンピック」も完全なかたちで開催されるだろうと思っていた…。

「日常？」「非日常？」「新しい日常？」どの日常が真なのか。私は今、どの日常を生きるのだろうか？ しばし、このカオスに身をゆだね、カオスを丸ごと眺めることもまた必要なかも知れない。しばらくそこに身を置き、光を探していると、数こそは少ないが、突然景色が違って見えるという経験をしたことがある。これまで約半世紀を生きてきた中で、突如、物事の見え方が変わる？…いや変貌することを知りました。

修論提出間際、まさに瀬戸際でした。夜な夜な研究室で一人悪戦苦闘の毎日。第三章にさしかかる頃、カオスがやってきた…。朝まで費やしても、一文字も進まない。そんな数日を繰り返していたある日、第二章との関係、第三章の位置づけが急に明るくなった…。第二章の柱、井筒俊彦の意識構造論と森有正の経験に関する思索が、何の機縁か？ 一気にリンクしたのには驚いた。この景色が消える前にと、ひたすらキーボードを叩き第三章を丸々書き上げた。心地よい疲労感とともに研究室を出た時、薄紫に霞む大学のグラウンドが、本当に違ってみえた。もう全身鳥肌だった…。修士時代の恩師の薦めで手にした井筒俊彦『意識と本質』にある「豁然貫通」に近い体験であった。井筒は言います。

天下に存在するすべての事物の理を次々に窮め、ついにその至極に到達することを要求する。こうして努力を続けること久しきに及べば、ある時点に至って突如、豁然として貫通するものだ。そうなれば、一切の事物の表も裏もあますところなく開示されるとともに、己の心の本体がそっくりそのまま開顕し、同時にその心の広大無辺の働きが残りなく明らかになる。

混沌の中で「努力をすること久しきに及べば…」数こそ少ないが、ある時雲の上にいける。その眺めは、それまでの日常とは明らかに違う。それでも、次の瞬間はこれまでと変わらぬ日常につながる。今の状況は、緊急事態の非日常が、人間の「慣れ」から日常になりつつある。これを新しい日常とっていいのだろうか？…いや、あの時経験した「豁然貫通」の後の日常こそが「新しい日常」の本物の深い意味なのではないだろうか。

「日常く非日常く新しい日常」は常に往来自由だ。すべてはそこを生きる我々人間の捉え方次第。現に、今を日常として生きる人々が増えつつある。連日、報道される日本人選手の活躍をこれまでのオリンピックとく同じように観ることができないのは実に寂しい。混沌に身を置いた末、これまでの日常（コロナ禍以前）と今の日常…新しい日常の根源的な差異に気付いた。スポーツの本質としての遊戯性（実人生からの自律）ゆえの違和感…スポーツはよりよく生きるための文化であるということ。生きることが日常の中核だとすれば、世界的危機において、この文化を堪能することへの違和感が、今…オリンピックを観る目にメガネをかける。それでも、観客のいない競技会場で純粋な競争に全霊を尽くす選手たちの姿はやはり美しい。我々はそこで人間美に邂逅する。この揺るがないスポーツの本質的価値をどう次世代の日常につなぐのか、スポーツの未来は私たちには託されているのかも知れない…。